



長岡造形大学 建築・環境デザイン学科 教授

# 山下 秀之

## 金沢旧東くるわ地区における複合文化施設計画

1961年 東京都生まれ  
 1984年 東京工業大学工学部建築学科卒業  
 1986年 独シュテーデル造形芸術学校  
 1987年 東京工業大学修士課程修了  
 1987年 株式会社日建設計国際事務所  
 1996年 R・ロジャース・パートナーシップ  
 1999年 インファジェンダ・インク 設立  
 2000年 長岡造形大学環境デザイン学科 助教授

### 設計概要(当時の文章)

本計画は、伝統的建築物の「保存と再生」の意義をふまえつつ、その環境に新しい空間を連結させるひとつの方法を提案するものである。

1. この地区の歴史が委ねた意味的負担と現代生活の機能的諸問題との間の絶え間ない矛盾が露呈している点に注目した。そしてこの矛盾は、私によって根本で解決され得ないと率直に判断し、この計画においてはゲシュタルト心理学的なものに焦点をあわせる事にした。
2. 構築的・幾何学的感覚から並列に連立する既存の住居集合をひとつの意味ある類形とみなし、それを手がかりに新たな建築群を〈示唆的〉に対置させた。
3. 2つの建築群の間に生じる〈差異〉は、既存の建築群の〈沈黙した底意〉によって導かれたものである。その結果、先の表意作用と機能との矛盾が2つの建築群の時間的断差として奇妙に反映しているように思われる。
4. 顕著な失敗は、検閲しすぎた結果、〈暗く〉なったことでしょう。

### ——当時はどんな時代だったのですか？

マイケル・ 그레이ブスが台頭し、西洋古典を異化したポストモダンが一世風靡し、磯崎新さんや八束はじめさんたちが、強烈なステイトメントを出していました。おそらくどの大学も、その波を真に受けていたように思います。磯崎さんが東工大で「劇場」の課題設計を指導した時、私もかなり動かされて課題を仕上げ、最高点に喜んでいました。でも、卒業設計の時にハタと疑問を感じ、結果、日本伝統建築の延長に、現代建築を考えることにしました。篠原一男先生の前では、当然な判断と思えますが同輩先輩後輩を見渡してもあまりいなかったように思います。その後、大学院1年の時、チュミヤコールハウスやハディットが、ラ・ヴィレット公園コンペや香港ピークコンペで顕在化し、雑誌で紹介されはじめ、アツという間に国内でデコンの流行がはじまった。学生はともかくとして、前線の建築家や評論家が、西洋古典に続き、こぞって後追いつけるのを目の当たりにしました。篠原先生は、こうした現象に一貫して異議を唱え、「しかし、大学の師にだけは倣ってよろしい」と…。ご自身はかつて清家先生を意識されていた。このように意匠系卒業設計は、「流行」と「スクールカラー」の狭間で始まるものだと思うのです。

### ——卒業設計のきっかけはなんですか？

シノハラスクールのカラーです。そして日本の伝統的な建築群造形があって、それ

に対峙するような新たな現代の建築群造形があって、その2つの関係性を主題にしたかった。対象地は京都・奈良でも良かったのですが、父の郷里が金沢だったので…よく知っていた「東のくるわ」(東茶屋街)に疑問の余地はなかった。あの静かな幾何学に惹かれていました。保存されている美しい街並みに対し、同じくらいのボリュームをもった現代の建築群を、つかず離れず並べ、静かで妖艶な関係をつくりたかった。



連続する繊細な木虫籠(きむすこ)のファサードに対して、ステンレスのパネルで覆われた「家型」を、複数並べました。複合するプログラムを家型のボリュームに分節し、少しずつずらし、振り、微妙に引き離し、平面形にヒダをつくりました。こうした形態操作のヒントは、街並の裏側がランダムにずれていることや、雁行する桂離宮や寺社建築の伽藍、増築に増築を重ねた温泉旅館などにあります。結局、私はこの手法を今に至って「サキイカ法」と名づけ、大学で建築意匠を教えています。サキイカのように、塊とプログラムを引き裂きながら、くっついた状態にしておくのです。

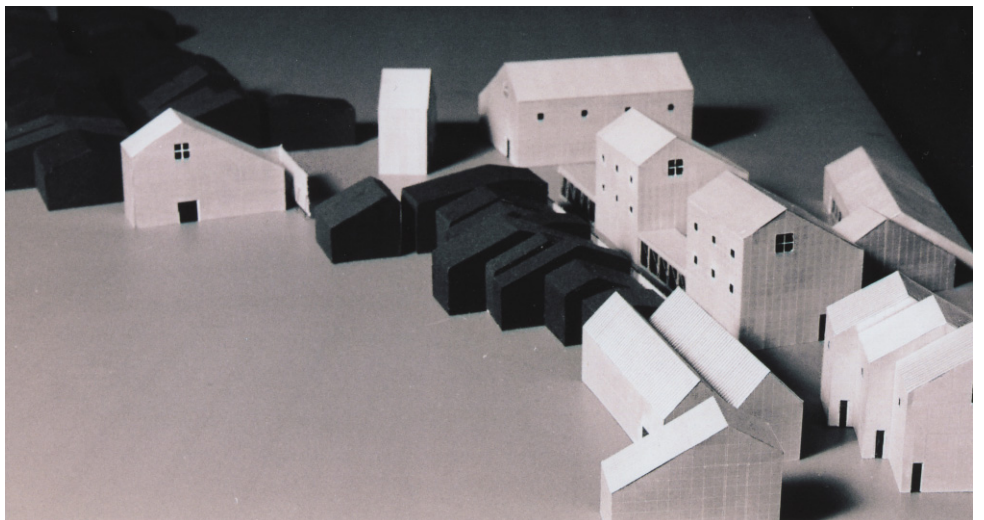
### ——卒業設計が現在の原点になっているということですね？

原点ですね。だから、今でもあの作品は好きだし、飽きないし…。シンプルなコンセプトは長生きします。その後、ピーター・クックのところへ留学し、植生と建築の抜き差しならない関係を学び、葦原の沼地に建築をうずめた時、建築のヒダに緑や水が誘われることを知った。山下研究室の課題であるアーキフォームとランドフォームの接続や折り合いも、あるいはネスティドキューブと名づけた入れ子のキューブも、すべて関係してきます。今、有機的再帰的な運動や、生物学的発生学的な多様性を指標にしていますが、可逆的に内部が外部にめくれあがる、あるいは内部が外部を持つといった位相的特質を重要視しています。今日のインタビューは、私の大学院生による展覧会「ミドリズム」の会場ですが、作品を見てわかるとおり、私たちの「ヴィジョンズ・オブ・アーキテクチャー」は、非常に明快であり、継続的です。

### ——最後に学生に対して言いたいことはありますか？

卒業設計は、それまでの約3年間の思考と全制作物あつてのこと。流行の模倣だけに頼っていたならば、その後の人生もその延長でしかない。卒業設計は、自身の全人格を背負う決意表明であるべきだと思います。好きになれる先生のもとでできればいいですね。

インタビュー：東京電機大学 久保 哲也 / 浅野 千恵子



卒業設計 模型写真

写真提供 / Yamashita Hideyuki